

“呪われた血”の叛逆詩人(11)

George Gordon Byron

楠 本 哲 夫

目 次

第九章 詩想の変遷

本稿のテーマは

——Veniceでの、詩人の遊蕩生活、Haremの如くくり^{ひろ}げられた酒地肉林の愛欲
の絵巻^{えまき}の中に、移りゆく詩人の心境とその詩想、詩型の変遷を究めること
——である。

四月中旬までには、Byronは、すっかり健康をとり戻し、RomeでHobhouseと合流。

幸運にも、詩人の新しいこのたびの経験は詩人にとって、新しい詩作の心をかきたてるものであり、創作欲が、油然と蘇^{よみが}えてくるのを覚えた。

Romeへむかう途中Ferraraを通りすぎた。ここでは、Esteのdukeたちが、かつては詩人の邪悪な天才genius, Calvinを大いに歓待してくれたところである。

Ferraraの、あのすさまじい牢獄のとりでの周辺を通りすぎながら、その蔭の中に、16世紀の詩人Tassoの小さい牢獄の地下室を見た。

牢獄のきしむ音をききながら、じっとその地下室の独房をみつめながら、そのそばを通りゆく人の心には、‘狂える詩人’とうわさされたTassoがあの‘Jerusalem’をかいているのが見えるようだった。

その次の、きしる音と共に、彼の食物が、地下室の中にさし入れされた。

‘Lament of Tasso’の中で、Byronは、このItalian poetに‘I love all Solitude’

といわせている。

しかしながら——

まさか7年間も狂人として、そのような、しうちをうけるとは、考えてもみなかった。

Byron自身もそうだったのだ。

監禁され、発狂の後、牢獄の閉ぢこめられた孤独へと退けられてしまった——

Byron自身もそうだったのだ。

それは、詩人の妻Anabellaとそして、英国社会が、詩人に科したものであった。

RomeでのByronの心境は、詩想は、ridiculousなものから、abhorrentなものへと、さらに、flatteringなものからsublimeなものへと移っていった。

St Peter寺院の屋根の上で、ある茶番劇的一幕が演じられた。それは、Lady LiddelがLord Byronの ‘Gorgon curls’ ^{へびのよう}な捲毛をみとめて、娘たち^にむかって、彼女らを制して、声をひそめ、

“バイロン卿をみてはいけません！”

バイロン卿をみるのは危険だから”と言った一幕だった。

このような公の迫害は、今、詩人にむかってむけられた、まことに、せんりつすべきほどに、冷酷なものだった。‘追放の詩人’にとって、世間の風は冷たかった。

詩人こそ、かつては、すべてのものは、衆目にさらすべきだ、という主義を信奉した旗頭であつたけれども。

そしてPrime Minister Percivalの暗殺者 Belliugham の絞首刑を詩人は1812年に目撃きしたことがあるが、それは、このItalyのギロチン台での、あの流血、叫び、祈りにくらべればはるかに俗っぽいものにおもえた。

見事に咲きほこつたRomeの芸術——

それは、詩人に、sublimityは、“崇高な世界”は、‘自然の巨匠’^{たぐみ}、‘神’によってのみならず人間の手によつてもまた、さらに見事に創られうるものだ、とい

うことを確信せしめた。

これまでの詩人は——

‘Perfection’ 完全なる相，理想美を，自然界における‘海’に，‘山’に，‘川’に，見出すことにより詩想を温めてきた。

そしてまた，神の創った人間界の花，美しい女性，動物界の馬，ライオン，虎などに，理想美を追求してきた。

だが，今，詩人は——

かつては‘cant’—人気とりの，偽善的文句—だと観じてきた‘芸術への激しい情熱’を全面的に理解することが出来るようになった。

かつて，Hobhouseは，Byronに高名な彫刻家Bertel Thorwaldsenの胸像を見るようすすめたことがあった。Byronには，しかし，その大理石の花輪がなんとなくflattery へつらう如きムード だとして，なんだか‘mounte bank’ 山師的にみえるのをきらったのか，むしろ反発を覚えたほどだった——今日，Albemarle Street 50番街の階段の胸像は，月桂樹を冠せられているが。

Byronの心を強く打ったのは——

その歴史に，その神話にみるすべてのRomeの栄光であった。

“古き，そして新しき，ローマのすべては，ギリシャを，コンスタンチノープルを，そして，すべてのものを凌ぐ……”と述べている。

Veniceで，病をえて，その療養中，詩人のliterary agent,——Kinnard——にかき送った。

“ちょうど，僕が29才の転換期^{かん}に立ち，そして今，これを折り返すとき，Childe Haroldはもうこれで全面的に筆をおこうかとも真剣に考えている——もし，Romeが僕を熱狂させ a fourth Canto の執筆を続けさせるべく駆り立てる詩境が湧かないのであれば……。そして，それはありうるかもしれないし，な

いかもしれぬ……”と。

しかしByronは――

the Seven Hillsを3週間馬で駈^かけたのち, Childe Harold, 4th Canto (そして、最後のCanto)を結局かきあげた。

それは、186 stanzaよりなるもので、“牢獄”にはじまり‘自由の海’あの‘dark heaving’ ‘boundless,’ ‘endless and sublime’な永遠^{えいゑん}のimageに終結する詩行である。

私はヴェニスに立った	溜息 ^{ためいき} の橋の上に
左手 ^{ひだりて} に 王宮	右手 ^{みぎて} に、牢獄
ここは	誰もこぬ世界
深いわだつみの底	妙 ^{たえ} なる楽 ^{がく} のきこえる
私は人を愛しないのではない	だが自然をより愛する

ここで、ふたたびByronのPilgrimage“巡礼記”は、偶像化されたのみならず諷刺の傾向をたどる。

Nightmare Abbeyの中のMr Cypressはafter-dinner speechの中で, Byronの第122及び、第126のstanzaをよりどころとして、“人生は、謂うなればupas tree 毒樹^{どくじゅ}である”と述べている。

ここでByronは――

幼少のころ, Calvinism ‘カルビン教’を乳母Maryより吹きこまれ、強いられ、洗脳^{せんろう}された生^おいたちが、彼を苦しめるのである。そして

“人間は、あらゆる意味で虚偽^{きょゐ}の創造物である”との信念を抱いてしまった。

“精神はみづからの美に犯され、その熱にうなされ、あやまれる創造物をつくり絶望^{ぜつぼう}という未知の天国をでっちあげる……”

人間として、われわれの保有するものは只 ‘Our right of thought’ われわ

れの思索する権利のみである。

これは、移りゆくそして、しばしば美しいことばで表現される真実の苦悩であった。

しかし、これはByronがなし得た彼のベストだったのだろうか？

ByronはManfredをみづから評して、‘私の古い文体ではとても手に負えぬものである’と述べ、さらに、Childe Harold, Canto IVも同様であると考えた。

Byronは、事実——

なにか、全く新しいものが熟することを求めてVeniceへ帰ろうとしていた。

Veniceへ着くやいなや、先ずRiver Brenta河畔のLa Miraの別荘をかりうけた。

これはVeniceから数マイル離れたところにあり、ここで彼は、馬を飼い、平坦な乾いた野原を早駈けすることができた。

このParadio様式の別荘はFoscarini家に属していたが、むしろ王宮、宮殿ともいった豪華なものであったが、

Zellotteseのフレスコ壁画、Veroneseの絵画、そしてPompeiで新しく発見された異教徒の芸術からの模写である、いたずらっぽい仮面、女怪物レイミア——上半身人体、下半身へび——などが飾られた豪華なものであった。

この豪華な別荘に、いち早くa racy element of comedyがもちこまれた。

Magarita Cogni—農夫の美しい娘で今、パン屋と結婚してLa Fornarinaとなっているが——がMariannaのrivalとなり、まもなく一騒動の後、彼女を追いつ出してしまった。

Magaritaは、Marianna同様22才で、Mariannaのもつすべて、いや、それ以上のものをもっていた。

彼女は、よりせの高い、よりたくましい、より奔放な、より美しい、より動物的、よりはげしい気性だった。

Byronは彼女に“a Pantaloon humour”と“無学の恩恵”を見出した。つまり、手紙のことで彼女がByronをなやますことはなかった。しかし、差出人が男性にしろ、女性にしろ、それをどうにかひそかに見わけるとは知っていた。

今や、Byronにとって——

故国英国は、とても遠いものとなってしまった。

とても親切だったMme de Staëlは 1817年に亡くなり、そしてまた彼にとって最も優しく最も善良で、最も親切だった、最も有能だったLady Melbourneもその翌年に、亡くなってしまった。

そして、このときByronにとって英国とのきづなはポツリと切れてしまったのであった。

Veniceでの生活は——

異形の、過剰な性行為を示しつつ、突如集結され、1817年9月の詩情としてByronの心の中に潜行し、うつつした。

Signor Segatiが詩人に、最も耳新しいあるヴェニス女性のゴシップのことを話してくれたことがあった。

それは——

やさしい愛情を示し続けたある、ヴェニス女性のもとへ、死んだ彼女の夫が戻ってきたという真新しいゴシップのことだった。

Byronは、このゴシップを彼なりに解釈し、具象化したい、と考えたとき、は

からずも、それを表現する最も理想的詩型が天啓の如く、彼の脳裏にひらめいたのである。

それは――

John Hookham Frereの、‘Whistle craft’という偽名のもとにかかれたmock-heroicロマンスで、Pulciの“巨人群と修道僧たち”についての中世的Morgante Magiore的韻律でつくられたものであり、そのとりあげた題目そして、その扱^{あつか}いは詩人の心にぴったりと気に入ったもので後年、彼はこれをみづから翻訳している。

Byronは、このFrereのironicな、そしてうちとけたtalkativeな詩風の中に、新しい詩作にとって、彼が必要とした理想的詩型を見出した。

そしてBeppo (‘Joe’)が生れたのである。それは――

夫と妻、そして愛人――Byronの妻 Annabellaの如く数学に秀でたblue-stockingな女性でもなく、また、深窓育ちのC. Lambの如く湖口の道の心配のない女性でもない、女性――との、通俗的、大衆的、喜劇である。

ByronとHobhouseは、11月――

Veniceに戻ってFrezzeriaに滞在した。そして二人にとって、いつものおきまりの生活をenjoyしながらLidioの海浜ぞいに馬で早駆けした。

しかし1月初旬――

Hobhouseは英国に帰っていった。そしてByronはまた、1811年のGrand TourのときのAthensでの生活同様、解放的ムードにひたり、ためらわず、また、謝肉祭、カーニバル、のあの放蕩的、大旋風、渦巻の中に身をゆだねてしまうのであった。

2月2日――

ふたたび、Mooreに書きおくって、その意中を打ち明けた。

“僕は、この1週間、一睡もできなかったよ。あの昔日の謝肉祭のとき同様、放埒な、苦悶の渦中にまきこまれてしまった。このたびもみんな、奇妙な仮面をつけての冒険にひたつたカーニバルを過した。”

あるとき激怒したFornarinaが、Byronに夢中になっているある婦人が、Byronの腕をとり、Byronをあえて独占しようとしたとき、彼女の仮面をはぎとった事件がおきた。Byronはさらに、こうつけ加えている。

僕は若き日にふみ迷った、あの鉱山の鉱石をもとめて最後の鉱脈をぎりぎりまでもとめて、どこまでもすすむよ。そしてそれから……。僕はこれまで生きてきた。だから満足している。後悔はしないんだ。”

Byronは1818年1月22日——

自分が30才の誕生日を祝ったのだという事実をたしかに考えていた。

余念を許さぬ一つの事実は——

この日(1818. 1. 22)の夕方、Allbrizzi伯爵夫人の家で、詩人は新婚三日目の花嫁、当時17才のGuiccioli伯爵夫人とめぐり合ったということである。そして、この出会いは、やがて詩人にとって、奇しくも新しい黎明 ‘a false dawn’ をむかえることになるのである。というのは、その後、詩人は15ヶ月もの間、このTeressa Guiccioliに会わなかったのだから。

1818年、それは——

詩人の生涯にとって、最も重要な年となるのである。

詩人の先祖代々の居城たるNewsteadの屋敷は、前年の11月、Harrow時代の友人Thomas Wildmanに94,500ポンドで売却された、との報を受けてより、詩人の心は生涯を通じて、はじめて経済的不安より解放され、やっと安堵感にひたることができた。

夏のはじめ、詩人は多少不潔な、Frezzzeriaを後にしてGrand Canal沿いの、豪華なマンションへと移りすんだ。

これは、Veniceのまちに7人の総督をおくったあるVeniceの名家の所有であつたが、詩人はこれを、この中央ブロックを年間200ルイ金貨で借りうけた。

水面のところにゴンドラにのるための、ステップと方形の鉄格子があり、そ

れぞれ、一階二階には大きな窓と石のバルコニーがついていた。そして赤いタイル屋根の、多くの小部屋があった。

この mansion の main salon は Italy でも最も豪華な plasterwork 石膏細工と mosaic 寄木細工の床で飾られていた。

言いつたえによれば、詩人は、——このマンションのバルコニーから Grand Canal にとびこむことができ、高飛び込みの、特殊な才能があったという噂が流布された。だがしかし、詩人は、眼下にうかぶゴンドラの妨柵の上で、串刺しになりたいとは毛頭、願いはしなかったであろう。だから、この噂は、いくつかの他のできごととのごっちゃまぜになった、世間の、巷の、単なるうわさにすぎなかったであろう。

Byron は、近くの宮殿からの帰路、しばしば運河を泳いでわたり左手にたいまつをかかげ、ゴンドラの船頭に合図したという。

また、Lido から Grand Canal まで、競泳して、Angelo Mengaldo というイタリ一人と Scotto スコットという男の、二人とも打ち負かした。

そして、また——

例の La Fornarina という女性は、Byron との情事の結末に抗議して、その示威運動を見せる如く運河に身を投じ、なかば溺死状態で救出されたという噂もつたわっている。

Byron は、この新しい生活を一人の Moncenigo の貴族プリンスの生活に適合させるものではなく、むしろその生活の中で幻想的規模と、肉体的、精神的、諸の活動の激しい速度歩調を、より早め、拡大し、つのらせていった。

今、Byron の生活する、この Palazzo Mocenigo は Moore に言わせれば 'Harem' ハレムであった。

Elena de Mosta に導かれた、数多くの女たちに侍られた生活であった。noble な女性群、凡庸な女性群、低俗な女性群——だがすべて春を売る女達であった。

その生き態は、かつての Grand Tour のとき、往時のアテネにくり展げた愛欲の絵巻、同様であった。

Byron にとって——

3000パウンドの遊蕩費をかけての、この売春婦たちに耽溺した愛欲の生活に加えて、さらに14人の召使たちがはべり、そして、もじゃもじゃの黒いあごひげを貯えた、だが、腕ききの Falcieri というゴンドラの漕ぎ手 Tita もかかえていた。

多くの、そして、だんだんと、その数が増えてゆく、飼育した動物の数は、—猿、きつね、マチーフ(毛の短い、大型の猛犬)、スイス産の牧羊犬 Mutz 等々、その種類、数は、さながらに、移動動物園であった。

こうした詩人の、ありとあらゆる放縦、気ままな生活態度とともに、そのスマートな長身も、詩人の最もきらった、詩人の仇敵ともいうべき肥満体へとすでに変り果てていた。

詩人の妻、Anabella の、スイスの友人の一人は次のように報告した。

“ほっそりとした長身、^{ハクセキ}白^{ビボウ}皙、美貌の Apollo—Byron のこと—も、今は、すっかり肥満し、太りきった姿態をさらし、彼の顔は満月の如くまんまるくなってしまうている。”と。

そして一方、Hanson は—所用で詩人を訪ね—おそらく、詩人のための必要書類に署名を求めるためであったろう—詩人の指関節は全く見えないほど肥満していることに気づいたほどであった。

18才のヴェニス貴族の娘 Angelina のバルコニーまで、肥満した身体をやっとこさ運びあげている詩人の姿は、まことに、こっけいでもあり、いたましく、もの悲しい一幅の絵であった。もっともポリスと牧師の干渉もあったことで、後に詩人は彼女との交際をやむなく、断念しなければならなくなっただけでも。

Shelly が英国から Pisa の近くの Bagni di Lucca へ、William と Clara, Claire と Mary をつれてきていた。

Byron は、妻 Anabella との別去の失意のころ、追放の身として、最後のちぎりを交した、そして子供をもうけた情婦 Claire とは、今後、二度と会わないと決意していたので、Palazzo Mocenigo で娘 Clara とその乳母とだけをむかえるように Shelley にたのんでいた。

Shelley は、Byron の要求どおり、その橋渡しの役割をころよくひきうけ

た。そして果したのである。

娘 Clara に会って Byron はとてもよろこんだ。とくに娘の^{あお}碧い目と金髪を見てとてもよろこんだ。というのは、それは、娘の母——dark hair だった——の Claire を思い出させることがなかったから。

しかし、この娘 Clara は、父親 Byron の“悪魔の魂”をゆづりうけていた。彼女の生いたちの諸の経験を考えるとき彼女が、父親ゆづりの悪魔であったとしても、それはすこしも驚くにはあたらないであろう。

Clara は彼女をとりまくどんちゃん騒ぎの好きな生活をよそに Shelley 家のスイス人 nurse, Elise の手により、手厚く世話され養育された。

この Shelley 家の nurse, Elise は30才で、Shelley とちぎることにより20代で、すでに庶子を生んだ女性である。

8月—

Shelley 夫妻と Claire (Clara の母) は、Byron がすでに、Allegra (Clara) を、快活で、博学な、Mrs Richard Hoppner—Venice の英国総領事夫人——に引渡し、その世話を願ったということを Elise からきいた。

Shelley は—

Claire をつれて、Hoppner 家を訪ね娘 Clara に会わせようと決意した。

さらに、そのあとで Byron にむかって体あたりで、猛然と反省の抗議をうながす決意を固めた。

Shelley は予告しないで、1818年8月23日、午後3時に、Hoppner 家についた。そして、この、この対談、話し合い、母と娘の対面は、延々と14時間つづいたが、それは2つの点でユニークな成功を収め得た。というのは

- (1) これは、のちに、結果的に Shelley の後年の名作, Jurian and Madalo (Shelley and Byron) を生み、また
- (2) Byron は Enganean Hills の Villa d' Este — Byron が Hopnner 家から借りていた—を、快よく、Shelley に提供するという寛大さを示し、そし

てここなら Claire は娘 Allegra に会ってよいと二人の自由な対面をゆるす
という結果を生んだのであるから。

Byron が、超大作 Don Juan の Canto I をすでに書き上げたということを Shelley は知っていた。このことは、Byron と Shelley の二人にとって重要なことであった。

肝^{かんたん}胆相照らす、揺^ゆらぐ、狂^{きやう}う、二人のこの、天才詩人は、今ゴンドラで滑りゆく。そしてそこで二人は精神病院を見る。

そしてこれが “Julian and Maddalo” の中でくっきりと描かれている。そしてあの風光明媚な Lido を馬で早駈けてゆき、過ぎゆきし Diodati の日々を偲ばせる、魅力的ふんいきの中で、夜を徹して、朝の 5 時まであくことを知らず議論にふけるのであった。

Shelley は、この Julian and Maddalo の中で Byron のことを ‘Count Maddalo’ として描き

‘His more serious conversation is a sort of intoxication.’

“彼が真剣に語るときのことは、陶醉に似たものがある” と述べている。

この、あくことを知らぬ二人の語らいこそ彼ら二人にとって、若くして死んでいった二人の天才詩人にとって、“ひろがりゆく砂漠” の中であって“甘^{かん}美^みなる陶^{たう}醉^{ざい}” の一ときであった。

9 月—

Shelley は、Villa d'Este を訪れるに先立ち Mary と 2 人の子供たちを Lucca から、Venice へとつれてゆき Byron の娘 Clara の世話をひきうけようとした。しかし、この計画は挫折^{ざせつ}した。この間 ‘little Ca’ は熱病のため重態におちいった。

そして痙攣^{けいれん}状態で彼女が死んだことは、Shelleyの非情さのゆえだと世間がこれを評したことはまことに悲しい。

だが、それは、Allegraが四年後に死んだことでByronも同じ非難を世間からあびせられることとなった。

一方ShelleyはNaplesで1818、12月、Elenaという私生児を認知した。

この幼い娘は、ナポリのある家族にひきとられるが1820年熱病のため死んだ。いろいろの理由でEliseがElenaの母親であったことはまちがいない事実であったようだ。—EliseはPaolo Foggiというイタリーの召使の男と、Elenaの誕生後一ヶ月後に結婚したがこの男は後にShelleyをゆする行為をさかんにくりかえしたという事実もふくめて。

その後、Shelleyは、自己批判と失意の気持ちだが、何ヶ月もの間、暗いムードとしてつづくのであった。

Byronも—Shelley同様、失意と自己批判のムードが深まりゆく。1819、9月までには、Don Juanのthe first cantoをすでにかきあげていた。そしてthe second cantoにとりかかっていた。Byronはこれに先立ち‘Mazeppa’なる活気にみちたコサック騎兵の話をかきあげていた。

今、Byronは—

Don Juanのthe second cantoをかきながら、彼の天才を抜群の詩才を惜しみなく、あますなく、解放し、ひろげゆくことを決意し公に、詩界にむかってきっぱりと宣言し、挑戦しつつも、暗胆たるByronの前途は黒雲が暗雲がたちこめていた。

Don Juanは陽の目をみるのが、果してできるだろうか。

Don Juanの出版にあたって、この作品中の最高傑作を

(1)Murrayは—根本的にcutせねばならぬと考えた。

(2)親友Hobhouseは—この詩は、全面的に発行を停止するようにと、のぞんだ。

このとき、1819、3月、Byronの苦悩の姿がくっきりと浮びでてくる。

Byron は――

肉体的にも、全身にむくみがでてきて、元気なく、精神的にも、この傑作の出版を狂えるごとく希求したがゆえに角番に立たされ追いこまれてゆく。

しかしながら、たとえ匿名でも、是が非でも出版のことを決意する。

しかし――

2ヶ月の間、この名作 Don Juan は、あえぎあえぎ、ヨロヨロと陽の目を見たい、生きたい、是が非でも生きたいと、消されんとしつつも、もがき、悶え、氣息えんえんといきづきつづけるのである。

Byron はこの最後の傑作に彼の生命をかけたのである。この期におよんで、肉体はおとろえつつも、生みの苦しみに、悶えるのであった。

Byron にとって――

南欧イタリーは、Shelley がそうみづからにむかって、うたった如く、Paradise of Exile “流謫の樂園”であった。この地イタリヤで育まれた解放的伝統詩型 Ottava rima —— 8行、10～11音節、ab, ab, ab, cc 押韻——と burlesque ユーモア精神が Byron の諷刺精神を見事に開花させた。

あの、親しい友に話しかける如く、あるときは道化する如く、あるときは擲揄する如く、自由、氣儘な調子でうたわれた Don Juan

一万六千行よりなる、この未完の絶筆こそ叛逆の詩人、諷刺の詩人 Byron の、冴えた知性に基づく詩情の豊かに結実し、見事に、絢爛豪華に花開いたものであった。そしてそれは Byron 精神のあますところなき流露であり、実に彼の ‘Philosophy of life’ であった。

しかしながら――

その抜群のすばらしさにもかかわらず、英国社会はこれを敢てみとめながらも、しかもその ‘moral’ の欠如のゆえに、悪魔的詩情のゆえにこれを批難し攻撃した。そして出版を拒否せんとした。

Byron 自身は、この Don Juan をして、‘道徳の規範’たらしめようとする逆説的大いなる自負に燃えたのであるが……

大器 Byron のこの抱負にもかかわらず、親友 Hobhouse にすらその出版を反対、批難され、匿名出版を余儀なくされるという、苦難の道を歩み生みの苦しみを味わねばならなかった。

しかし詩人は、生命をかけて、是が非でも、‘Don Juan’に‘産ぶ声’をあげさせるべく苦悩したすがたは、いたましくも悲壮ですらあった。(続、次号へ)

参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford : Byron, Hutchnson.
- 2) Ernest Hartley Coleridge : The Poetical Works of Lord Byron ; Lewis Prints.
- 3) Francis, M. Doherty : Byron.
- 4) Leslie, A. Marchand : Byron's Poetry, John Murray.
- 5) John, D. Jump : Byron, Rontledye & Keygan Paul.